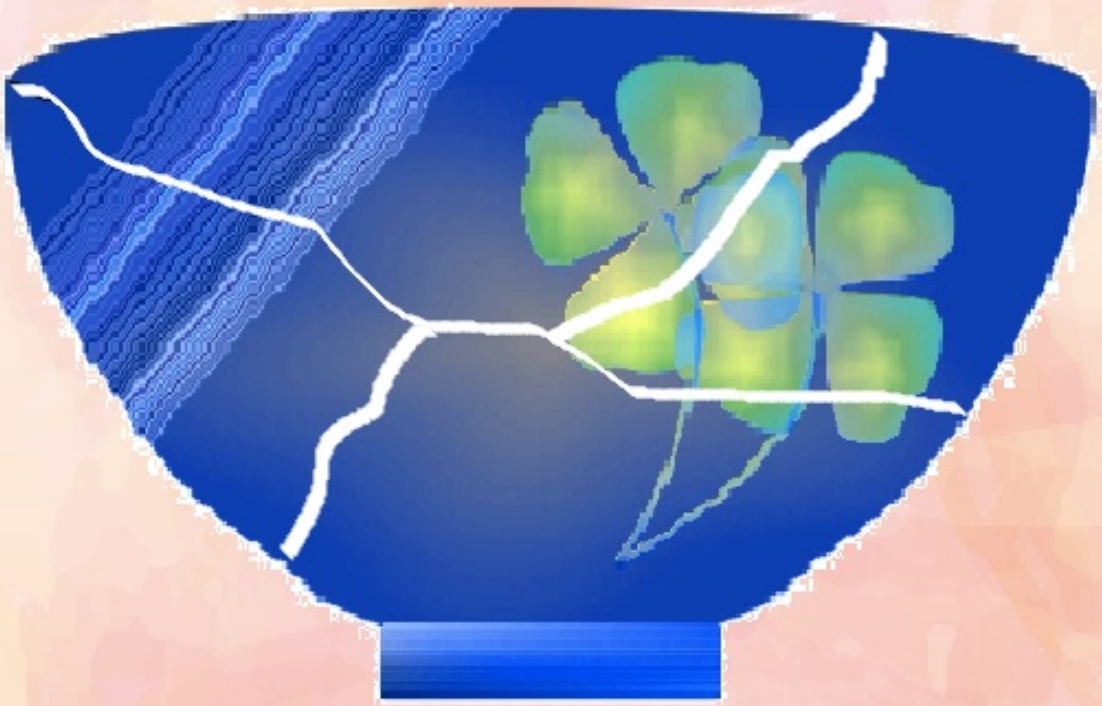
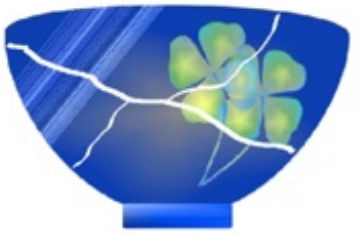
菊乃の茶碗



大橋りょうこ

「佳奈ちゃん。確か君、学芸員だよね」
　突然小林さんにそう呼びとめられ、私はきょとん、とした。
　公民館の俳句講座を終え、帰る支度をしながら、私は次に皆の前で披露する句をいろいろ思案しているところだった。その最中にいきなり的外れな質問が飛んできたものだから、思考が一瞬停止してしまった。
「あ。違ったかな」
私の反応に動揺した俳句仲間、小林さんの顔を見た瞬間、私は現実世界に引き戻された。
「え、ええ。そうです。学芸員です。今年なっぱかりの新人ですが」
　この講座で唯一の２０代である私は、地元の民俗資料館で働いている。俳句講座に若者が参加するのは珍しく、当初緊張して一人ぼっちで座っていた私に、気さくに話しかけてくれたのが、今年８０歳になる小林さんだった。笑った顔がチャーミングな、丸顔のおじいちゃんだ。
「それなら、壊れた物の修繕はできないかな。ちょっと頼みたいことがあるんだよ」
　安心したのか、小林さんは渡りに船と言わんばかりの様子で、教室のテーブルに紫色の風呂敷包みをそっと置いた。小ぶりの箱が包まれているようだ。
「君はぼくの知り合いのなかで一番若いから、目もいいだろうし手先も器用だろうと思ってね」と、紐が丁寧に掛けてあるその木箱を見せてもらった瞬間、私は合点がいった。
「これ、焼き物ですね」
　ああ、と小林さんが箱の中の布と薄葉を広げ、私がその奥をのぞき込むと、もとは茶碗とおぼしき物が、見事に大小５つの破片に割れていた。
「あちゃー、これは」
「難しいかな」
「いえ、接合そのものはボンドがあれば意外と簡単にできるんですが、ご飯茶碗として普段使うのなら、危ないし買い直したほうがいいんじゃ……」
　そう言うと、小林さんは笑って首を横に振った。
「ああ、いつもは別の茶碗を使っているんだよ。これはずいぶん前に割れてしまったものでね。ずっと保管してたんだけど、やっぱりちゃんと直して置いておきたくて」
「そうでしたか。そういうことなら」
　きれいに直せるよう頑張ります、と私は小さな木箱を慎重に受け取った。自分のような若輩者がと思いつつ、いつも親切にしてくれる小林さんの期待に応えたかった。

「……よし、これで完成」
　その夜。作業用に机に広げていた新聞紙を折りたたみながら、私は己の修復の腕前に思わずにやりとした。
　大学生の頃、学芸員の資格取得のための実習で、破損物の補修作業を何度か経験したこともあり、茶碗の接合はそれほど苦戦することもなく終えることができた。よみがえった青色の茶碗は、大きな四つ葉のクローバーが絵付けされた、かわいらしい柄だった。



　小林さんらしいなあと思いながら、私は机のわきによせていた木箱にちらりと目をやった。
　蓋の左下すみっこに、小さく墨字で『菊乃』と書いてある。箱を受け取ったあのとき、思わず「キクノ？」とつぶやくと、小林さんは少し困ったように笑いながら頭を掻いた。
「いやあ、忘れないようにと思ってね。ちょっといろいろあって。ぼくの身勝手で傷つけてしまった人がいてねぇ……」
　それで、何故わざわざ茶碗の箱に名前を？
　あまり他人の事情に首をつっこむのも良くない気がしたので、詳しいことは聞かなかった。が、そのかわり小林さんから、更に不思議な質問をされた。
「ところで佳奈ちゃん。菊の花をどう思う？若い子は嫌いかな」
　あの質問にはさすがに目が点になったが、『菊乃』という名前と関係があると悟り、私は少し戸惑いながらもできるだけ慎重に答えた。
「私は、きれいな花だと思いますよ。上品なイメージがあります」
　すると小林さんは嬉しそうに、そうか、ありがとう。と目を細めた。
　ありがとう？人生で最も頭の上にはてなマークが浮かんだ瞬間だった。今日の小林さんは一体どうしたのだろう。
　菊乃。きれいな響きだ。誰の名前だろう。奥さんだろうか、はたまた昔の恋人か。「恥ずかしいからこの件は家族に内緒で」とまで言われては、気にならずにいられない。

　私は布団にもぐりこんで、昔ながらのたくましい想像力を、一人夜中の部屋で発揮してみることにした。

　暗い天井に黒髪の美しい少女が浮かび上がる。年は１６、７といったところか。机に向かい勉強をしている。傍らにたたずんでいる一人の青年は、あれは若かりし頃の小林さんだ。少女の両親から、ぜひうちの家庭教師にと頼まれ通っているのだ。２人は幼なじみだった。
　青年の小林さんはなかなか凛々しく、平成生まれの自分から見てもけっこうなイケメンだ。少女から青年に向けられる熱い眼差し。言葉は少なくとも通じ合っているような、甘酸っぱい雰囲気。はーん。この２人、人には言えない秘密の関係なのね、と布団の中でにやにやする私。妄想は続く。
　ある日、就職の関係で遠方に引っ越すことになった小林青年。彼女には二度と会えないかもしれないと心を痛めていると、少女が突然青年の家に訪ねてくる。何やら小さな包みを持って。
「これは君の家で昔から大切にされている茶碗じゃないか。ご両親に叱られてしまうよ。早く元あった場所に戻すんだ」
「いいんです。受け取ってください。どうかこれを私だと思って……」

「菊乃さん」
「いつかまた、会いに来てください。私、ずっと待ってますから」
　ああ若い２人を引き裂く悲恋。想いをつなぐ小さな茶碗。セピア色に包まれる美しい昭和の風景。しかし２人の再会が叶うことはなかった。なぜなら菊乃は１９のときにひどい肺炎を患いこの世から……。

「そんな、菊乃さん！」
　私は布団からがばりと起き上がった。涙で目の前がかすむ。
「かわいそうな菊乃さん。きっと小林さんは、再会を果たせなかった申し訳なさでいっぱいだったんだ」
　だから初恋の人の名前をわざわざ書いおいたのね、と勝手に納得する。
「きっと何かの拍子に落として割ってしまったんだろうけど……。大事なお茶碗だもの。割れたままにしておきたくないのは分かるわ」
　うんうんとうなずき、私は涙を拭きつつ再び横になった。
　菊乃さんはどんな気持ちで待っていたのだろうか。勝手に思いを巡らせてはまた溢れた涙をぬぐうという滑稽な行動を、私はその後一晩中繰り返すのであった。

　朝を迎え冷静になると、昨晩の妄想劇場のあまりの稚拙さに顔から火が出そうになった。思わず熱くなった頬を両手で包み込む。
　手元にある情報が少なすぎて陳腐な展開しか思い浮かばなかったとはいえ、さすがにあれはないだろう。
　そうだ、直したのは自分なのだから、菊乃という名前の真相について尋ねる権利があるはず。変に遠慮するよりも、いっそストレートに訊いてしまったほうがいいだろう。自分は明日からまた仕事だから、次回の講座で会ったときに思いきって訊いてみよう。詮索するようで失礼かもしれないが、このままでは私がいつまでもスッキリしない。
　布団をたたみながら、私は机の上の木箱に視線を移した。いったいこの茶碗には小林さんのどんな秘密が隠されているのか……。

　そして、次の土曜日。風呂敷包みを持って意気揚々と俳句講座の教室に入るまではよかったが、肝心の小林さんの姿を見つけられない。あれ？と辺りを見回すと、小林さんは体調不良で欠席だって、という声が耳に入った。
　少しがっかりしたが、まぁお年寄りなんだしそんな日もあるだろう、と思い直した。
　しかし次の週も小林さんは現れなかった。それからまた一週間後、小林さんが自宅で突然倒れ、すぐさま病院に運ばれたがそのまま息を引きとった、という知らせが教室に届いた。

　資料館の受付で、私はぼーっと壁の時計を眺めていた。
「心不全、かぁ」
　あの日の嬉しそうな照れ笑いが最後だったなんて。無意識にため息がこぼれる。隣に立っていた先輩学芸員に注意され慌てて背筋を伸ばすも、あっという間に心ここにあらず、の状態になってしまう。
　あまりに唐突すぎて涙も出てこなかった。ここしばらく、ずっともやもやしている。なぜなら例の茶碗はまだ自分の部屋にあるからだ。家族には内緒で、という約束を律儀に守っていた。おかげで小林さんが亡くなったと聞いてから２週間、１日も心穏やかに過ごせていない。
　どうすれば良いのやら。

　夕方自宅に着くと、母がぱたぱたと玄関にやってきた。
「佳奈、お客さん。あんたに用事だって」
　平日の夕方にお客とは、いったい誰だろう。急いで居間に向かうと、小柄な若い女性がちょこんと座布団に正座していた。私に気がつくと、彼女は長い黒髪を揺らしてふんわりと控えめに微笑んだ。
「遠藤佳奈さんですね。突然すみません。ここに四つ葉のクローバーの絵のお茶碗があると……」
　そこまで聞いて私は思わず「あ！」と叫んだ。そして、いきなりの大声に目を丸くする客人をよそに、「ちょっとお待ちください！」と大急ぎで２階へ駆け上がった。
「ちょっと佳奈、失礼よ。ごめんなさいねぇ、礼儀がなってない子で」
　母が娘の無礼を詫びながら、女性を２階の部屋まで案内する。遠慮がちに中をのぞく彼女を、私は手招きした。
「どうぞ。お茶碗って、これのことですよね」
　接合された茶碗を私がそっと取り出した途端、彼女は息をのんで机に駆けよった。そして震える手で茶碗を受け取り、まじまじと見つめると、なんと急にぼろぼろ大粒の涙をこぼし始めた。
「えっ、ええと……」
　予想外の展開にしどろもどろになる私の横で、困ったことに嗚咽まで漏れ始める。
「あ、あのう、あなたは小林さんのお知り合いなんですよね……？」
　狼狽しながらもそう尋ねると、彼女は涙を流しながら茶碗を抱き、答えた。

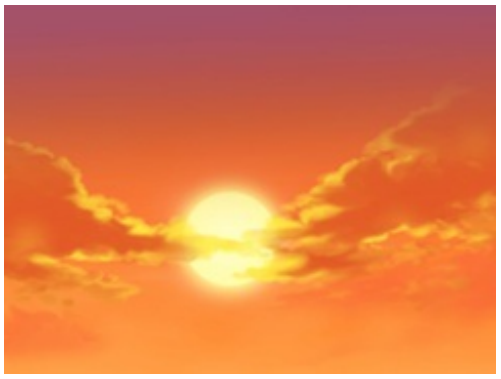
「私、孫なんです。小林菊乃といいます」

　思ってもみなかった返答に、「へ？」と間抜けな声が出た。

「このお茶碗を割ったのは、私なんです」
　出された紅茶を一口飲んで、菊乃さんは言った。母にはしばらく外してもらい、私と彼女は二人きりで、居間のテーブルをはさんで向かい合った。
　彼女はいま県外の大学に通う２１歳で、大事な試験のため葬儀には出席できなかったが、やっと時間が取れたので急きょ帰ってきたという。
「実は祖父が私に手紙を残していたんです。それで佳奈さんのことを知って、祖父の友人にこの家の場所を教えてもらいました」
　そんなことはどうでもいい。いまはもっと大事な、訊くべきことがある。
　私は身をのり出し菊乃さんに顔を近づけた。
「小林さんは以前、自分の身勝手で傷つけてしまった人がいると言っていました。菊乃さん、あなたのことですか」
　すると菊乃さんは、また唇を震わせ目をうるませた。
「そうだと、思います。私の名前は祖父がつけてくれたのですが、私は小さい頃からこの名前が大嫌いで」

　彼女の話によると、菊乃という名前が原因でクラスの男子によくからかわれたらしい。菊の花は死んだ人に供える花だから不吉だ、と。
「子どもって単純でしょう？菊は縁起が悪い花だと馬鹿にされたことが何度もあって。私自身も、言われているうちにそうだと思い込んでしまったんです」
　私は天を仰いだ。縁起が悪い花だなんて、そんな発想が小さい子どもから出てくるわけがない。きっとどこかの愚かな親がそう言い出して、それを信じた悪ガキがいたのだろう。嘆かわしい話だ。そもそも菊自体に悪い意味はないはずだ。
　菊乃さんは続けた。
「そのストレスが積もりに積もって、中学のとき、ついに爆発しちゃって。祖父に八つ当たりして怒鳴り散らしたんです」
　なぜこんな名前をつけたのか。古くさいし全然可愛くもない。菊の花なんて大嫌いだ。
「そのとき祖父が気に入って大切にしていたお茶碗を、怒りにまかせて床に叩きつけてしまって……」
　あのときの祖父の悲しそうな顔が忘れられない。あとになって悪いことをしたと我に返ったが、変な意地が働き、結局謝るタイミングを逃したまま月日が流れた。
　ここまで話して、菊乃さんは数秒黙り込んだ。視線を落とし、箱の蓋に記された自分の名前をじっと見つめる。
「佳奈さん。菊の花言葉ってご存知ですか」
「え、いいえ」
　すると菊乃さんは少しだけ頬を緩ませて、
「高貴とか真実の愛という意味があるそうです。大人になってからやっと調べて分かりました。祖父はきっと、すごく考えに考えぬいて私の名前を決めてくれたんだと思います」
　そう言って、蓋を少し撫でた。

小林さんは、分かっていたのかもしれない。自分がもう長くないことを。ぎくしゃくした関係のまま、孫娘に会えなくなるかもしれないことを。
「このお茶碗、私が持っていてもいいと思いますか」
　菊乃さんの表情が不安げに一瞬曇る。
「手紙を残したくらいですから、菊乃さんに持っていてほしいんだと思います。どうぞ大事になさってください」
　私が応えると、彼女はホッとしたように顔をほころばせた。この瞬間、長時間張りつめ交錯していた糸が、やわらかくほどけていくような感覚をおぼえたのは、私だけだろうか。



「いいんですか、玄関先で」
「ええ、お構いなく。家、近いですから」
　そう言ってこちらに振り返った菊乃さんは、茜空を背ににっこりと微笑んだ。その胸には、しっかりと風呂敷包みが抱かれている。
「このお茶碗、ずっと大事にします」
　私ではなく、自分自身に強く言い聞かせるように、菊乃さんは目を閉じた。

　小林さんが割れた茶碗を残していたのは、きっと、自分のせいで孫を傷つけてしまったことを忘れないようにするため。しかし今、その青色の茶碗は別の理由で菊乃さんの両手に包まれている。
　橙色の道を行きながら何度もこちらを振り返り手を振る菊乃さんの表情は温かく、どこかすっきりしていて、ふと小林さんのあの包み込むような笑顔と、重なって見えた。